徒然短編集

椎名湊

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
徒然短編集

【Ｎコード】
Ｎ１８７０Ｖ

【作者名】
椎名湊

【あらすじ】
一作十分で気軽に読める短編作品集です。恋愛ものとコメディがメイン。

雪降る聖夜に温かな恋の物語を（前書き）

この作品は中学三年生の時に初めて書いた小説です。今、見返してみると恥ずかしい出来です。

雪降る聖夜に温かな恋の物語を

例年以上に、冬将軍が猛威を振るう十二月。それに加えて、追い撃ちを掛けるかのように津々と雪が降り続いている。

しかしそんな極寒の中であるというのに、町はいつも以上に活気付いていて、そこらかしこで赤い服を着た学生のアルバイトが、「ケーキはいかがですか？」と町行く人々に声を掛けていた。

そう、今日はホワイトクリスマス。雪降る聖夜が道行くカップル達を祝福するかのように白い奇跡を辺りに振り撒いている。

俺はそれを横目に、黙々と歩みを進める。別に、羨ましいとかそういう感情は抱いていない。俺にだって聖夜を共に過ごす相手がいるのだから。

肩に掛かる人工色のない茶髪に、大きくてつぶらな黒い瞳。ちょっと病的なくらい真っ白な肌に、整った目鼻立ち。今話題の人気アイドルに負けないくらい可愛いし、綺麗だ。ほら、噂をすれば影ってね。

視線の先には、赤を基調に、白いふわふわのファーが付いたパーカーを羽織り、それと同じデザインのミニスカートを穿いた女の子がいた。おまけに、頭にちょこんと乗せた帽子がなんとも愛くるしい。

いわゆるサンタコスチュームに身を包んだ俺の彼女が、仏頂面でクリスマスケーキの客寄せをしていたのだ。

元々の素材の良さに合わせて、年にそう何度も見られない可愛いらしいサンタコスチュームを着た彼女は、言うまでもなく男の目を引く。

彼女の可憐さに釣られて、男共は入れ喰い状態となり、みるみるうちにケーキの箱が売れていく。

そんな様子目の当たりにすると、なんだか胸の中にもやもやとした気持ちが燻ってくる。

そうは言っても、どうすることも出来ず、数十分ほど傍観していると、彼女を取り囲んでいた人だかりが消え、その跡に残っていたは、山のように積まれていたケーキの箱を売り尽くしたケーキ屋の店先といまだに仏頂面を続ける彼女の姿だけだった。

俺は彼女にゆっくりと歩み寄り、驚かせないようにとなるべく高ぶる気持ちを抑えながら声を掛けた。

「咲、もうバイトは終わりだよな？」

呼び声に気付いて咲はこちらに振り返った。そして俺の姿を見ると、仏頂面を引っ込めていつもの無表情に戻った。

「……海斗」

澄んだ宝石みたいな咲の瞳が俺を映す。

「全部売れたんならもう終わりだろ？」

「……ん」

俺の質問に考え込むように顎に手を添える咲。ほんと、美人ってやつはこういう一つ一つの動作でさえも絵になるよな。

ぼーっと咲に見取れていると、ぐっ……ぐっ……と服を引っ張られた。俺は慌てて思考を切り替えて咲をしっかりと見据えた。

「何？」

「着替えてくる。少し待っててて」

咲は簡潔に用件を告げると、俺の返事も待たずにすたすたと店の中に入って行った。

「お待たせ」

待つこと、十分ほど。何故か制服姿で、この店のケーキの箱を持った咲が姿を現した。

「何で制服着てるんだ？　もうとっくに冬休みだろ？」

「数学の補習。それからそのままバイトだったから」

咲は多くを語らず、要点だけ話すと、俺の左側に歩み寄り、左腕にそっと右腕を絡めてきた。咲の体温で、寒かった体が少しぽかぽかと温まったような気がする。

俺は「そっか」と素っ気ない返事を返すと、帰り道に向けて足を進

めた。

咲も静かに俺の歩みに合わせて、歩き出した。

「それでさ、その箱はどうしたの？」

俺は咲の左手に持たれた箱を指差した。初めは「……ん？」と首を傾げていた咲だったが、「……まだ言ってなかったっけ」と呟くと、俺の問いに答えた。

「『今日は咲ちゃんバイト頑張ったから、クリスマスプレゼント』って店長が」

俺は「ああ……」と相槌を打つと、その情景を想像してみた。人の良さそうな顔をしつつ、いやらしい目つきで咲をなめ回しながら、プレゼントでご機嫌取りってイメージがやけにしっかりと思い浮かぶ。

一度顔を拝んだことがあるが、人当たりの良さそうな顔で本性を隠していそうな嫌な奴だった。

なんだか、先ほどの人気といい、今の想像といい、咲が俺以外の奴にじろじろ見られてると思うと、胸の中のもやもやとした燻りが、いっそう強く感じられた。

「確かに大人気だったもんな」

言葉に強い刺を含んだ物言いだった。しまったと思ったが、すでにもう遅く。咲は表情の読めない顔で、じっ……と俺を見つめてくる。

「……どうしたの、海斗？」

咲は相変わらずの無表情で、俺の瞳を上目使いで覗き込んできた。

「……なんでもない」

まともに咲の目を見ることが出来ない。せっかく、吐き出しそうになった黒い感情を抑えたのに、咲の目を見ると押さえ込んだ物が漏れ出してしまいそうだったから。

「……もしかして、嫉妬？」

「……悪いかよ」

ずばり言い当てられ、仕方なしに本当のことを言った。

すると、咲は病的なくらい真っ白な頬を少し赤に染めて、俺の腕にもごもごと顔を埋めた。

「……悪くない。嫉妬するほど、私が好きってことでしょ」

俺は珍しい咲の感情表現と照れ臭い言葉に、つられて顔を赤くした。

ごまかすように、顔を逸らし、煙草をくわえ、火を点した。

口の中に煙草の味が広がり、続いて鼻孔の奥、そして肺の奥へと広がっていく。

そんな俺をお構いなしに咲は言葉を続けた。

「……私も高校で授業中、海斗が大学で他の女に言い寄られてないか不安」

俺は咲の言葉に答えずに、ただ煙草を吹かしている。

「……でも、安心した。海斗は私以外見ていない」

咲はそういうと、鞄からなにやらごそごそと取り出してそれを俺の首に巻き付けた。

「……私からのクリスマスプレゼント」

首元に目をやると、ベージュ色のマフラーがしっかりと巻かれていた。

「……お揃い」

咲は鞄の中から、さらにもう一つマフラーを取り出して、自分の首に巻き付けた。

「……あったかいね」

「うん、暖かい」

咲はますます頬を赤らめる。顔は無表情なのに……。

俺がじっと咲を見つめていると、咲はぷいと顔を逸らした。

恥ずかしいのか？　珍しくおどおどして、ちらちらとこちらを窺ってくる。

すると、突然咲が何かに気付いて俺の胸ポケットに手をやった。

俺のポケットから取り出したのは煙草。咲は箱から一本取り出して口にくわえた。

「……火」

「駄目だ」

咲は俺にライターを催促してきたが、俺はもちろん断固拒否する。

「む……」

咲はジト目で俺を睨んでくるが、俺は知らない振りを通した。

「……海斗」

「駄目だ」

「……そうじゃなくて、こっち向いて」

何だよ。と咲の方へ振り向いた瞬間、グイッとマフラーを引っ張られた。

そして……

ジュッと火が点く音が耳に届いた。

目の前には、瞳を閉じて唇を突き出し、キスをするかのように俺の煙草と自分の煙草を重ね合わせる咲の姿。

赤い火が点った二本の煙草と俺達の顔。二本と二人の間で立ち上がる煙。

咲はそっと目を開けて、ゆっくりと顔を離していった。じっと俺の目を見つめて。

「煙草は二十歳からだ」

「……うん、ごめん」

お互い、照れ隠しで正反対の方向に顔を逸らした。

俺達の間をしばしの沈黙が包む。

なんだか恥ずかしくて、こそばゆくて、嬉しくて。触れ合う心も体も、ぽかぽかとあったかくて。

冬の寒空の下、暖かな幸福が俺達を包み込んでいた。

「咲」

「……なに？　海斗」

焼けそうなくらい心も体も熱くなって……。俺は雪も溶かし尽くすくらい温かくて、熱い言葉を紡ぐ。

「好きだよ」

咲は目をつむって思いを胸に染み渡らせるかのように、こくんと頷いた。

「……私も好き」

雪が津々と降る、ホワイトクリスマスの夜。俺と咲は温かな恋の物語を歌う。

俺とお前のリサイクリング（前書き）

高校一年生の春ごろに書いた作品です。

俺とお前のリサイクリング

「はー……、あっちぃわぁ」

長い長い梅雨明けの今日、昨日は警報すら出たっていうのに文字通りそんな事実など水に流してしまったような快晴である。

背中に浴びる西日と田舎名物の急勾配による二重の責め苦を味わい、絶賛サイクリング中の俺は「太陽くたばらねぇかな……」と、間接的に人類滅亡を願ってみたりしている。

自転車のペダルを漕ぐ足には長時間労働による疲労感が生き生きと自己主張をし始めた。

額に浮かんだ汗が流れて目が痛む。あーあ、肌ベタベタで気持ちわりー。どうせなら女の子とベタベタしたーい。そしたら肌ベタベタ気持ちー。

……なんて妄想してたら、「ハッ！　殺気！？」と首をぐわんと首だけ後ろに向いて、エクソシスト・オンザ・自転車を実演した。ん、英語って難しいね。

すると、不機嫌面を顔面に貼りつけたうちの制服を着た女が俺と同じく汗水垂らしてペダルを漕いでいた。

何故か凄い形相で睨み付けている先には俺の姿があって、確認のため目を逸らしてから改めて見やると、やはりその憤怒の感情は俺に向けられているのだと確信に至った。何故？

ともあれ、一方的にやられるのは癪な、負けず嫌いのB型男子たる俺は負けじと睨み返す。

そのまま、ペダルを漕ぎ続けること体内時計で約三分。

「あ」

間の抜けた声を上げた女にようやく諦めたか、と勝利の味を噛み締めようとした瞬間、ドンッと強い衝撃が車体を揺らし、その勢いで俺の体は自転車から離れた。

「あ」

俺の口から間の抜けた声が出たと同時に頭にガツンと強い衝撃が――いってぇぇぇぇ！？

目をきつく閉じて痛みを噛み殺そうとする前に視界に入ったサイドテールは、俺を嘲笑うかのようにぴょこぴょこと踊っていた。

「なんでまだここに居やがりますかですかこの野郎」

「ん、暇潰し」

苦痛にのた打ち回り、痛みが和らいでから目を開けると、むすっとした表情で口も真一文字に結んで、茜色に染まりつつある空を背景にそいつは俺の顔を覗き込んでいた。

猫みたいな顔だなぁ、とまじまじと見つめながら、男の性か値踏

みしてしまう。

それを察したのか女は露骨に嫌そうな顔をしてギュワンという擬音が付きそうな勢いで顔を離した。

「あたしの顔をじろじろ見てんじゃねーですよ」

辛辣な言葉を刺々しい態度で吐き出して、手に持った何かを俺の顔の上にかざした。狙いを定めるように、片目を閉じて、そしてパッと手を離して投下した。

おっとっと、とそれを掴んでそれを見やる。

スチール缶だった。

「くれんの？」

「百二十円」

へいへい、とポケットから財布を取り出して適当に掴んだ硬貨を手渡す、触れたその白い指先の柔らかさにドギマギなんかしちゃう女性経験の無さがなんとなく情けなかった。

「え、二百十円もくれるの？　毎度ありー」

にしし、と快活に笑いながら、俺にそれを見せ付けてくる。……しまったなぁ、百円玉と十円玉間違えたー、……暑いしどーでもいーやー。

むしむしと熱気を放つアスファルトから上半身を起こして、プル

タブに力を込めた。

プシッ、と快音が鳴り響き、それに気分を良くした俺はぐびぐびと中身を喉に――、

「ぷべらぁっ？！」

熱っ！？　はぁ！？　え、ナニコレ？　意味分かんねぇっす、ドロドロしてるっす。

キッ、と仕掛人を睨むと、当の本人はゲラゲラと愉快そうに笑っている。

「あっはははは！　こんな暑いのにコーンポタージュとか飲んでやんの！　ぷっ、あはははは、ひぃっ、ひぃっ、お腹捩れるぅーっ！」

「……死ね」

ボソッと呪詛の言葉を呟くと同時に、女の顎をくぃっと持ち上げ、小さく開いた可愛らしい口の中にコーンポタージュを注ぎ込む。

「ふぇっ？　あ、あ、熱、熱い！　喉焼けるー！　ドロドロが、ドロドロがぁぁぁぁ！」

苦悶の表情を浮かべる猫みたいな女の姿を楽しみながら、最後までポタージュを注ぎ込むのであった。

だらーん、と二人の男女が寝転がり、照りつける西日と熱々のア

スファルトに焼かれている光景がそこにはあった。

道行く人々が訝しげな視線を向けてくるが、暑さと先ほどの争いのお陰で、すっかり羞恥心というやつは夏バテで仕事をサボっていた。

「あっづーーい……」

「えっ、と……遠峰、だったよな？」

「そだよ、なに？　ストーカー」

「ちげぇよ、馬鹿。倉石が遠峰のこと、いいなぁーって言ってたから覚えてただけ」

「へー、ふーん、あっそー。遠回しにお断りしといてー」

口実に使った倉石が本人の預かり知らぬところでフラれてしまった。うん、まぁドンマイ。

ホントは俺がクラスじゃ二番目に可愛いなぁと思って一方的に覚えてただけなんだけどな。ちなみに一番可愛かった天宮って子は、転校しちまったので、現在は遠峰が名実ともにナンバーワンだ。

「そーいうあんたは誰？」

クラスメートの名前くらい覚えようぜ、ねぇちゃん。

「武田」

「あっ、そう」

聞いといて、それかよ。

「んで、なに？　武田」

「なんであんな不機嫌面して、俺を睨んでたんだ？」

「いやー、苛々してたから前にいる奴事故らないかなーって、思ってさ」

お陰で見事に事故ったよ。

「へぇ、遠峰が苛々するなんて珍しいな」

「……。あたしって、珍しいと感じられるほど武田に知られてたんだ」

「……」

やっべ、墓穴掘った。まだ墓石は用意されてないからセーフだよな？　フォロー、フォロー、なんとかせねば。

「あっ……と、ほらっ、遠峰学校じゃいつもはつらつとしてるだろ？　悩みなんかなさそうだと思ってたから、さ。似合わねー、とかそういう感じ」

「そーかな、あたしはいつも悩んでるよ。それも、とっても難しい問題。この国の法律変わらないかなー、みたいな？」

犯罪でもする気なのか？

「よいしょ」という掛け声とともに、遠峰の身体が起き上がった気配を感じる。

「話してあげるから、サイクリングにでも付き合ってよ」

降って掛かった不機嫌そうな声音のお誘いに、俺は返事の代わりに飛び起きた。

しゃこしゃこしゃこ、と前輪の漕ぎ急ぐ音が二つ夕暮れ時に響く。

背中に当たる西日が細長い二つの影を形作り、そしてその影は何かに追われるかのようにスピードを上げている。

「にーちゃんがっ、さぁっ！」

「……はぁっ、はぁっ、にーちゃん？」

「あたしの、にーちゃんっ！」

殆ど怒鳴っているかのような声音で二人の間では言葉のラリーが行われている。例によって、道行く人々は何事かと俺たちを見るが、羞恥心はこの暑さで既に溶け切っていた。

それにしても、遠峰に兄がいるなどスクープだ。なんかうちの姉貴と違って親しげっぽいし、羨ましいなその遠峰兄とやらは。ああ、俺も遠峰ににーちゃんとか人生一度でいいから言われてみてー。

そんな考えを抱いていると、暑さと疲労にあっさり負けた俺たちは歩くスピードと大差ないくらいの遅さで道を蛇行するようになった。

「にーちゃんが、二週間くらい前に入院してね？　お見舞いに行ったら、にーちゃんとおんなじ顔した女が居てさ、林檎剥いてにーちゃんにあーんってしてたの。あり得ない、にーちゃんはあたしのだしっ！　なに、あの女！」

思い出したら腹が立ってきたのか、遠峰の足がげしげしと俺の横っ腹を蹴る。さっきのコーンポタージュが胃から上がってきそうになった。

「それで？」

「そいつ美人だし、林檎剥くのもあたしより上手いし、そいつと話してるにーちゃんはあたしと話してるより……楽しそうだし、なんか美男美女お似合いで、あたしが入り込む隙間がなくて、悔しくて、それで、それで……」

段々と遠峰の口調が萎んで、最後には口がキュッと真一文字に結ばれる。

俺は言葉を間違わないように、頭の中で一つ一つ慎重に選びながら、口を開いた。

「遠峰は、その兄貴が好きなのか？」

「……うん」

「んで、おんなじ顔だっけ？　ドッペルゲンガーみたいな女に泥棒猫されちゃった？」

「……うん」

「遠峰」

「なに？」

「前、前」

へ？　と遠峰が声を上げる間もなくガシャン、とけたたましい音が鳴り響いて、遠峰の自転車が電信柱に激しく衝突した。

「マジ最悪……」

自転車の前輪が景気良くねじ曲がり、遠峰は膝が擦り剥けていた。傷口から雑菌が入って化膿したら大変だという建前を上げておいて、傷口に舌を這わせた。

「ん……」

遠峰は少し恥ずかしそうに膝と膝を擦り合わせながら――俺の脇腹をぼこすかと殴る。拳がこの変態野郎！　と語り掛けて来ているような気がするが、無視して傷口を舐め続けた。

「……変態」

公然とセクハラ行為をされて、羞恥と怒りが入り混じった表情で、僕を睨み付けてくる。

俺は憮然とした態度で応じ、弁明というか、遠峰の気を引こうと、それっぽいことを言ってみることにした。

「さっきの続きだけどさ。遠峰は諦めてるだけだじゃん。ホントに好きなら諦めないでもっとガツガツアタックしなよ。それで、さ。失敗したら俺が愚痴聞いてやるから。あわよくば二号さんとして立候補するから」

遠峰は丸く目を見開いて、そして次は呆れたように目を細めて、最後に目尻を緩めてクックッと笑った。

「武田ってあたしより馬鹿だね」

「んなっ！　せっかく励ましてやったのにその言い草はなんだ」

「ふーん、励ましてくれてたんだー」

「あ、う、うん」

「……武田ってちょっとにーちゃんに似てるかも。雰囲気がちょっとだけ」

どうせ、美形じゃねーよ。

「だから、武田のこと好きになっちゃったかも」

「は？」

「男で二番目だけどね。お望み通り二号さんだよー」

これは、喜ぶべきこと……なのか？　でも、二号だし、本命の代用品だし。

だけど――、

「いいね、略奪愛って燃えるね」

可愛い女に好かれて嬉しくない男は男じゃない！

「あはは、武田じゃ絶対にーちゃんは越せないよー」

「俺は遠峰兄とは違う道を歩むから越えるとかそんなんじゃねーから」

「くふふ、負けず嫌いだねぇ」

「違うっつーの。まぁ、取り敢えず、ほれ。後ろ乗れ」

手招きして、俺の自転車の荷台を指差す。

「自転車壊れてるから、鍵掛けて置いてけ。んで、明日取りに来よう。今日は俺が家まで送ってやる」

遠峰はそう言った俺を見てニヤリと含みのある笑みを浮かべた。

「そういう恋愛に打算的なところがにーちゃんと違うよねぇ。武田

の提案はあたしの家を知ること出来るし、明日あたしと会う口実が出来るもんねー？」

「と言いつつ遠峰は後ろに乗ってるけどな」

自転車が、茜色に染まる坂を駆け降りる。生き生きとした加速が続き、ぶわっと全身の毛穴が開くように、吹き抜ける風の爽快感が俺を襲った。

「あはは、この勢いで飛び出したら下手すると死んじゃうねー」

「遠峰となら俺は死んでもいいぞ」

「あは、臭い台詞。ついでに武田汗臭ーい、背中びしょびしょー」

「遠峰も汗でベタベタだろ？」

「そーだねー」

脇腹とふくらはぎがガスガス蹴られる。自転車が一瞬制御不能になってフラフラと蛇行した。

それに驚いたのか、遠峰の腕が俺の胴体に回される。その細い腕は控え目で、俺の汗臭い背中との密着をそれとなく避けているようだった。ちぇっ、つまんねー。それにしても遠峰の二の腕、白磁ようにきめ細やかだなぁ。触りてぇなー。

「……あっぶねー」

「なに、その今更なリアクション？　全然面白くないよ？」

「別にウケは狙ってねーよ」

「あたし面白い人好きだけど、にーちゃん面白いし」

「芸人目指します」

「あはっ、変わり身早ーい」

うっわ、やべぇ。こいつマジで可愛いな。やっぱり遠峰を前に乗せて抱き付く口実とか作ればよかった！

「今、頭ん中でえっちぃなこと考えたでしょ？」

「はは、何のことやら」

こんな可愛い子にほぼ初対面で好かれるなんて、俺超ラッキー。まぁ二号さんだけど。

「なぁ、遠峰」

「なにー？」

「好きだ」

「ふふっ、あたしも好きだよー、二番目に。しかも暫定」

暑い暑い梅雨明けの空に能天気極まりない言葉のラリーが行われる。

腹に回された腕の締め付けが、さっきの告白まがいの言葉で強まったことに思わず頬を緩める。

遠峰の控え目な胸の膨らみが背中に押し付けられていることとか、遠峰の甘い匂いと汗の酸っぱい臭いを合わせて甘酸っぱい青春だーとか、有頂天になっている俺はきっと二号さんとして甲斐甲斐しく遠峰に尽くしていくのだろう。

楽観的に悲観的な未来をぼんやりと描いていることなどお構いなしに、自転車は坂を下り続けた。

あわよくばこんな時間が続きますようにと、西日に願いを掛けながら。

流星は青空を駆けて（前書き）

高校一年生の夏ごろに書いた作品です。

流星は青空を駆けて

本日は晴天なり。

風も髪を揺らす程度の爽やかな微風、雲もそんなに多くありません。つまり――、

「絶好のスカイダイビング日和ね！」

上空二千五百メートル地点でお嬢様は快活に微笑んだ。

東宮家（あずまのみや）の家令（要は巷で流行の執事のことである）歴三十年のわたくしがよもやこんな仕事に就くことになるとは想像もつきませんでした。

お嬢様は今日、人生初の愛の告白をなさるのです。お嬢様はお相手の男性に放課後、学校の屋上で待つようにと約束を取り付け、そして何故か今に至るのでございます。

「お嬢様、何故スカイダイビングをなさるのですか？　お相手の男性がお待ちになっていると思われますが」

わたくしがそう尋ねますと、お嬢様は中学生にしては発育の良い胸を張って、尊大な顔でわたくしにこうおっしゃいました。

「爺も、もう歳ね。今、時代のニーズは落下系ヒロインなのよ！」

いやはやお嬢様。爺はまだまだ若い者には負けませぬぞ。

「はて、落下系ヒロインとはいったい……」

「ふふん、この尊大で偉大で聡明な私、東宮志乃が爺に教えてやろう、落下系ヒロインの素晴らしさを！」

今日もお嬢様のお調子はすこぶるよろしいようです。

「爺よ、想像してみなさいな。ある日、ふと空を見上げるとこの世のものとは思えない美少女が降ってくる様子を」

「ふむ、今世紀稀に見る大事件ですな。確かにこの世のものとは思えませぬ」

「そして降り立った美少女が自分のことを好きだと告白してくるというシチュエーション」

「事件を通り過ぎて事故でございますね。放送事故でございますね。着地に失敗して放送事故でございますね」

「これに心を乱されずして、何に乱れると言うのかしら？」

「確かに心は乱れましょう。下手すると大惨事でございます。もしかするととても人には見せられないおぞましい光景を見るかもしれませぬからな」

わたくしはそう言いながら、お嬢様が手に持つグラスにワイン――、ではなく葡萄ジュースを注ぎました。

お嬢様がおっしゃりたいのはつまりつり橋効果というものでしょう。確かに遥か上空から同年代の女性が落ちてきたら恐怖するでし

ょう。ドキドキするでしょう、心臓に悪いくらい。しかし、お嬢様。それではお相手の男性は間違いなく引きます。関わり合いたくありません。

「某映画監督の作品にもあったであろう？　『親方！　空から女の子が！』とな」

「お嬢様は飛行石の代わりにパラシュートで降りてくるので、きっとその少年は某国の特殊部隊の降下作戦と思いますでしょうな」

「私の計画に死角なしね！」

「お嬢様、死角だらけでございます。わたくしの視覚で感知出来る範囲でも死角だらけでございます」

「爺、その洒落つまらないわ」

「流石、お嬢様。散々わたくしの話をお聞きにならないというのに、そこだけは聞き逃さないとは」

どうしてこんな風に育ってしまったのか爺には分かりませぬ。莉奈様もお嘆きなっていることでしょう。

『お嬢様、目標地点上空に到着致しました』

ヘリのパイロットから通信が入り、大層機嫌を良くしていたお嬢様の頬が少し強張りました。お嬢様の身体もまた怯えた子犬のようにプルプルと震えだします。怖いのなら、おやめになればよろしいでしょうに。一度言い出した以上、後には退けないのでしょう。わたくしが助け船を出しましょうぞ。

「お嬢様、やはりやめておいたほうが……」

「な、なにを言うか！　わ、わ、私はちっとも怖くなどない！　これは武者震いだ！」

「左様でございますか……。それでは」

わたくしは扉を開きます。突風が吹き込んできて、お嬢様の艶やかで長い黒髪がバサバサと風に煽られております。

「きゅ、急に開けるでない！」

「ささ、お嬢様お早く。お嬢様が決心なさったのならば、わたくしに止める力も義理もありませぬ。お相手の男性がお待ちかねです」

わたくしの言葉にお嬢様は床に這いつくばりながら、扉の外を覗き込みます。わたくしもお嬢様に習い、覗き込みます。

扉という隔たりの先には広大な空間が広がっておりました。地面が遥か下に位置していて、お嬢様だけでなくわたくしも思わず息を呑みました。

「さぁ、お嬢様」

「こ、これ！　せっせと最終確認をするでない！」

「お嬢様、わたくし感無量でございます。お嬢様がなけなしの勇気を振り絞って愛の告白、そしてあまつさえスカイダイビングとはわたくし、家令冥利に尽きます」

「押すな、押すでない！　落ちる、落ちるから！」

「ははは、何をおっしゃるやら。お嬢様の成長を後押しするのがわたくしの役割でございますぞ。それにお嬢様は落ちるために来たのでしょう？」

「今のこれは、その後押しとはちょっと違うからっ！　押すなぁぁぁ！　こ、心の準備をさせて！」

すーはー、と深呼吸をなさって、お嬢様はキッと前を見据えました。

「絶対押しちゃいやだからね。私は自分の意志で飛んでみせるんだから！」

「仰せのとおりに」

お嬢様のちっぽけな背中に強い決意が浮かんでおり、わたくしはとても押すことなど出来やしません。

「絶対に押すなよ」

「押しませんよ」

お嬢様は再び前をお向きになります。

「絶対に……押さないでね」

分かっておりますよ、お嬢様。

「絶対、絶対、絶対、絶対、……押さないで、ね？」

「いってらっしゃいませお嬢様」

ドンッ、とわたくしは恐縮ながらお嬢様の背中を蹴りました。

お嬢様は毛を刈り取られる羊のような表情を浮かべ、一瞬宙を舞います。

そして待ち受ける墜落。

「え、きゃぁぁぁぁぁ！？」

勇敢にも地上へと向かって墜落していくお嬢様。それはまるで一つの小さな流星のようでございました。

「さぁ、お嬢様を追うのです」

『ラジャー』

追跡を始めるわたくしたち。お嬢様は大きな雲を突き破り、そこに風穴を開けます。

スカートがバサバサと暴れまわり、今にも髪の毛が重力に逆らうかの如く天へと飛び立ちそうです。

ぶわっとパラシュートが開き、下から受ける風を受け止めて一瞬にしてグッとお嬢様の落下速度が下がります。いよいよ、地上が近くなってきました。

お嬢様は懸命に目を凝らして、目標地点を見やります。校舎の屋上に立つ人影が何かの気付いたようで、ふと目を上げました。

案の定、ギョッとなさっているご様子です。それもそうでしょう。下から吹き上げる風でスカートが翻り、パンツ丸出しでパラシュートを担いだ女性が空から降ってくるのですから。

何の奇跡か、お嬢様は見事に座標ピッタリで屋上に辿り着きました。

しかし、着地の寸前、突如吹いた突風に煽られて、お嬢様の着地点は地面から想い人の彼の上へと変わりました。

そしてお嬢様は自らのパンツを想い人の顔に覆い被せる形で着地を成功させました。

その衝撃で想い人は後頭部から地面にぶつかり、その勢いでザザザ、と彼の体は地面を滑ります。

そしてその上にパラシュートが覆い被さり、二人の体がその中へと消えます。

しばらくして、もぞもぞとパラシュートが動いたかと思うと、お嬢様が想い人の襟首を引っ掴んで、ずりずりと引きずって出て来ました。

彼は頭を擦りながら、被害者だというのに空から降ってきたお嬢様のご様子を心配そうに窺います。

成る程、現代稀に見る好青年です。お嬢様が惚れてしまうのも無理はないでしょう。

お嬢様は曖昧に笑って誤魔化すと、想い人に背を向けて、何度も何度も深呼吸を繰り返します。いよいよ緊張が最高潮に達したのでしょう。

それから五分は経ったでしょうか。お嬢様は想い人に振り返り、懸命なご様子でこうおっしゃいました。

「すりれるっ！　付き合ってくらひゃい！」

一世一代の告白をお嬢様は盛大に噛みました。

カラスがかーかーと鳴き、夕焼け空が眩しい頃、小さな人影が屋敷の前に現れました。

泣いていらっしゃったのか、目が真っ赤に腫れて、鼻水の跡が所々で見られました。綺麗なお顔を台無しにして、トボトボとパラシュートを引き摺って歩くその姿は、何とも言えない哀愁味と悲壮感で漂っており、下手な慰めなど口に出せる筈もございませんでした。

「お疲れ様でした、お嬢様」

「疲れた、もう寝る」

「お疲れ様でした、お嬢様」

わたくしはもう一度、出来る限りの慈しみを込めてお嬢様を抱き

締めました。お嬢様の発展途上の胸がお腹の辺りに当たってとても気持ちいいです。

お嬢様は泣き腫らした顔をわたくしの胸に埋めて、モゴモゴと口ずさみました。

「爺、加齢臭がするよ」

パァンッ、と心地の良い快音をお嬢様の頭が響かせました。

生き物語り（前書き）

高校二年生の夏ごろに描いた作品です。

生き物語り

一．魚

――ありえない。俺は気が狂ったか。

１０時間もこのテトラポッドに座り込み、収穫はたった今釣りあげたこの１匹のみ。それも手のひらサイズだ。食える部分なんてほとんどない。

別に釣った魚を食う為に竿を投げているわけじゃない。それでもしけた日に釣れた最後の１匹がデカくてうまい魚なら、これまでの時間も無駄じゃなかったと思いこむことができるだろう。

「あ、あの……俺、おいしい魚じゃないんだ！　食うとやばいんだ！　その……食ったら死ぬぞお前？」

魚が喋った。んな馬鹿な話があるか。見たところハゼかなんかだろう。いや、別にハゼじゃなくたって魚が言葉を発することなんてないだろうが。

「『まるごと唐揚げにすりゃ食えんじゃね？』とか思うなよな！？　俺を食うならコンビニでカップラーメンでも食えって！　その方が腹膨れるぞ？」

周囲には誰もいない。よかった。仮に俺の気が狂っていたんだとしても、誰もそれを見ないってことだ。この魚が喋っていたんだとしても、それを誰も聞いてないってことだ。

「釣りの基本はキャッチ&リリースだろうが！　むやみに自然界の動物を食おうとするんじゃねぇ！　つまり俺を海へ帰せ！」

「……キャッチアンドリリース？」

「そうだ！　お前も釣りを嗜む人間ならそれくらい知ってんだろ！」

やばい。会話しちまった。魚と。こいつはとうとう通院を考えるレベルだ。何の病院に行けばいい？　耳鼻科か？　精神科か？　それにしても口の悪い魚だ。

「趣味で楽しんでんなら逃がせ！　家に帰れば飯食えるんだろうが！　お前が俺を食う必要なんかどこにもねぇんだ！　とっとと離しやがれこの馬鹿野郎！」

「おい。魚。よく聞け。お前はキャッチアンドリリースって言ったな？」

「ああ、そうだ！　意味はわかるよな？」

「わかる。でもな、お前は釣りあげられたとは言え、こっちが針に付けてエサを食ってんだ。ここでお前を海に返したら、それってただの餌付けじゃねぇか」

もう駄目だ。俺は魚と会話のキャッチボールをしてる。言語を用いて魚と意思疎通を図ってるんだ。馬鹿げてる。でも成り立ってる。成り立ってることが馬鹿げてる。

「つ、釣りあげた快感をお前にプレゼントしただろう？　俺たちは体を張って快感をお届けするエンターテイナーなんだよ。わかるか

？」

「じゃあ例えばの話だ。警察が無銭飲食の犯人を追っかけて捕まえた。捕まえた警察官はそりゃ達成感に満ち溢れるだろうよ。そこで無銭飲食の犯人が『達成感をプレゼントしました。それではさよなら』ってそれでまかり通ると思うか？」

「思う」

「ふざけんな！」

ふざけた魚だ。魚には人間の常識が通用しねぇのか？　あ、当たり前か。魚だもんな。魚類と哺乳類の壁は超えられないか。半魚人じゃあるまいし。

「とにかく勘弁してくれよ……俺まだこんなに小さいんだぜ？　まだ将来有望なんだよ。ジンベエザメさんも俺に一目置いてるくらいだ」

「ジンベエザメが？　ハゼに？」

「そうだ。奴はこう言ったんだよ俺に。『食えねぇ奴だ』ってな」

「生意気ってことだよ」

ここまで会話してるんだ。この声が俺以外の人間に聞こえているかどうかは確認できないが、俺が魚と会話してることは『幻未満事実以上』だ。

１人きりで朝っぱらから１０時間。特にやることもない休日を海

釣りで過ごすことは珍しくもなんともない。だが魚が喋ったのは珍しいどころじゃない。事件だ。俺の身に危険が降りかかってると言っても過言ではない。

「と、とりあえず針を外してくれねぇか？　口内炎になっちまう」

「あ、あぁ……」

魚が口内炎になるのかどうかは疑問だが、このまま吊るしておくのも嫌なので針を外した。水の入ったクーラーボックスに放つと、奴は元気に泳ぎ出した。

「狭いなぁ。どうせ釣られるんならもっとでっけぇボックスもった奴に釣られたかったぜ」

「悪かったな貧乏で。で、お前なんで喋れるんだよ。魚のくせに」

「知らねぇよ。俺がたまたま人間と同じ言語を持ってるだけだ」

たまたまってどういうことだ。そもそも魚類は言語を持つのか？呼吸の方法だって違うっていうのに、通じ合えるわけがない。

渋い顔でボックスの中を見つめていると、魚がこっちを向いた。

「世の中ってのはなぁ、当たり前だって思ってることが通じないものなんだよ。隣の家と自分の家でルールが違うように、世間ってのは何も一つじゃねぇ。様々なルールで動いてんだ。お前の当たり前を、俺に押しつけるんじゃねぇよ」

「魚らしからぬ意見だな。まぁ、お前の言うことはもっともだが」

「まぁ……俺は釣られた以上お前に食われちまうわけだ。言いたいことくらい言っておきたかったんだよ」

悲しい顔をした気がした。魚が。

「食えるか。お前みたいな喋る魚。薄気味悪くて食う気もおきねぇよ」

「ほ、本当か？　じゃあ俺を海に……」

「飼う」

「は？」

「俺ん家でお前を飼う。いい水槽あるから、そこで泳げよ」

「……食えねぇ奴だ」

「お前がな」

家族が1匹増えた。

二．インコ

そこらで見かける動物と言えば、散歩中の犬、野良猫、公園の鳩、山道の鹿。せいぜいその辺りが無難じゃないかと思う。百歩譲って動物園から逃げ出した何かだ。トラやライオン、熊なんかが逃げ出した日には恐ろしくて歩けないけどね。

黄色い鳥。いや、黄緑色？　憂鬱な学校からの帰り道で見かけたそいつは、普段道端で見かけるような鳥ではなかった。

「おう中学生！　元気にやってる！？」

喋った。喋る鳥。インコだ。一時期日本にもインコブームがあったから、今でも飼っている人は多い。野生ってことはないだろう。誰かのペットが逃げ出したのかな？

「ちょっと！　ちょっとこっち来て！」

呼ばれた。インコに。

解せない疑問は置いておき、道端に映える黄緑色に近寄った。

「言葉が通じるようだね！　オイラ、見ての通りインコなんだ！」

「随分饒舌なんだね」

「今は特別だからね。ていうか聞いてよ！　酷いったらありゃしない！」

怒っているのだろうか。表情がうまく読み取れないけど、言葉は怒っているときのものに聞こえる。

「どうしたの？」

「オイラはさ、人間と触れ合って籠の中で餌をもらいながら、飼い主とイチャイチャしながらぬくぬくと生きたいんだ」

「う、うん……」

「でもね。オイラの飼い主は何を思ったのか、オイラをいきなり籠から出して、外に出したんだよ……」

逃がしたってことかな？　飼うのが面倒になってしまったのか。

「飼い主はオイラに言ったんだ……。『籠の中に閉じ込めてごめん。これからは自由に空を飛びまわれ』って。オイラはそんなこと望んでないのに、可哀想なものを見る目で、オイラを外に飛ばせたんだ」

「そうなんだ……。でもそれなら言えばよかったのに。君がこんなに喋れるなら、飼い主に意思を伝えることもできたんじゃないの？」

「それができたら苦労しないさ……」

どういうことだろう。今こうして僕と会話が出来るほどに訓練されたインコが、飼い主と意思疎通できないなんてことがあるのだろうか。

「君が飼い主を思いやって、何も言わなかったってこと？」

「うーん。まぁそういうことにしておくよ。とにかくオイラは迷える小鳥になってしまったんだ。不本意にね」

鳥も鳥で大変なんだなぁ。でも、飼い主の気持ちもわからないでもない。飼っていた鳥が大きくなるにつれて、籠の窮屈さが可哀想

になってくる。そんなところだろう。

今まで自由を奪ってきた。今日まで癒してもらえた。だから今度は自分がペットに何かできないかと、そう考えたのかもしれない。

「君はさ、飼い主に捨てられた、って思う？」

「そ、そうは思わないっていうか、思いたくないけど……」

「僕はきっと、飼い主も君のことを考えていたんだと思うな」

「そうなの……かなぁ」

僕は思ったことを伝えた。コンクリートの道端に座り込み、目の前の低い塀に留まっているインコと話した。

こんな珍しい経験、もう二度とできないかもしれない。インコの気持ちがわかるなんて、インコと言葉のやりとりができるなんて、誰かに自慢できるような話だ。

「つまりオイラと飼い主は、気持ちがすれ違っていたってこと？」

「そうだよ。言葉の通じる人間だってすれ違うことばっかり。今日も僕は人と心のすれ違いで嫌な思いをした。でも、僕は相手のせいにしたくないんだ。だって、すれ違いってお互いが相手に近づこうとするから起きるものでしょ？」

「うん……」

「大事なのはすれ違って嫌な思いをした結果じゃなくて、お互いが

お互いを思った過程だよ。そこさえ忘れなければ、絶対にいつかわかりあえる！」

理想論かもしれない。僕は所詮まだ中学3年生の子供だ。大人の事情という武器に対する防具を持っていない。頭でっかちで隙だらけの子供。でも、僕はそういう考えでいたい。じゃないと今この憂鬱な気持ちが報われない気がするんだ……。

「ちょ、ちょっと君？　泣いてる……の？」

「へへ。今日のこと思い出したら、なんだか泣けてきちゃって……」

「オイラまで悲しくなるよ！　泣くのはやめようよ！」

中学3年生にもなって僕は、道端でインコに向かって泣いてる。僕よりこのインコの方が悲しいはずなのに。すれ違ったせいで、今まで一緒に過ごしてきた人とお別れして、一人ぼっちで……。

「な、泣くのはやめよう！　オイラがいじめてるみたいじゃないか！」

「……え？」

なんか、今おかしなことを言われた気がする。

「ほら、その……オイラが子供を泣かすインコだって知られたら、もう誰も飼ってくれなくなっちゃうじゃ……あ、こんなときに自分のことばっかり考えて……ごめん……その……」

しどろもどろなインコ。焦るインコ。謝るインコ。インコは喋ることができると聞いたことがあるけど、ここまで意思を伝えてくる動物なのか？　しかも言ってることもなんだか面白いし。

「な、なんか上手く言えないけどさ、君は家に帰れば家族がいるじゃん！　兄弟もいるのかな？」

「う、うん……」

「帰る場所があるってことは、明日また元気に『いってきます！』って言えるってことだ！　オイラとは違うんだ！」

インコに励まされてる。人間の僕が。いや、でもインコとか人間とか関係無くて、なんだか友達みたい。すごくいい人だ、じゃなくてすごくいいインコだ。

「はぁ……これから野生に返るなんて無理だ……。餌の取り合いでカラスと争うなんて考えたらもう泣けてくるよ……」

友達だ。こんなに悲しそうにしている友達。

「……お母さんに聞いてみる！」

「え？」

「僕の家で一緒に暮らそう！」

「……えぇ！？」

「嫌かな？」

「嫌じゃないです！　むしろ嬉しいですヤバいです！」

ヤバいって便利な言葉だなぁ。イントネーションで気持ちが伝わってきちゃう。そりゃインコも使うよね。

「絶対飼うからね！　そしたら3ヶ国語勉強しよう！」

「よーし！　夢はインコのトライリンガル！」

「需要あるといいね！」

「こいつー！」

憂鬱な学校からの帰り道が、明るい黄色に照らされていった。

三．犬

うちでも何かペットを飼おうかしら。そう思っていた矢先の出来事だった。隣の家の犬が三歳になったとかで奥さんがご挨拶にやってきた。

「うちの太郎ちゃん今日で三歳なのよぅ。ホントに可愛くて可愛くて、三年なんてあっという間なのねぇ！」

正直、他人の家のペット事情程どうでもいいものはない。年賀はがきにプリントされたのはそっぽを向いた犬。ご丁寧に名字までつけられて、吹き出しで『あけましておめでとう！』と言わされている。

その姿が愛くるしいのは痛いほどわかる。私も小さいときは実家で猫を飼っていて、相当溺愛していたからだ。

「あ、立ち話もなんなのでどうぞ上がってくださいな」

「あらあらごめんなさい！　それじゃお言葉に甘えて」

こっちも相手と同じくらいのおばさん。お茶しながらのおしゃべりは大好きだからね。客用のスリッパをスッと出し、リビングにお隣の奥さんを上げる。

お隣の犬はダックスフンド。短い足で走り回る可愛らしい小型犬だ。大型犬はちょっと怖いけど、頭が良い分言うことを聞く。小型犬はやんちゃだけど、見た目は大型犬より可愛くて好み。やっぱり猫にしようかしら……。

「今お茶菓子出しますねぇ。ちょっと待ってて下さい」

「いえいえお構いなく」

キッチンに向かい、先日買ってきたクッキーを出し、紅茶を煎れて戻る。平日の昼間は週一回でお喋りしているので、我ながら慣れた手際に感心してしまう。

主婦になる前はこの手際が仕事に活かされていたと思うと、なんだか年を感じるけれど。

「なによ。私にはもてなしの一つもないってわけ？」

「え？」

今誰かが喋った。でも奥さんじゃない。奥さんしかいないのに、奥さんの声じゃない。テレビの音声だろうか。

「こっちは寝不足で早く昼寝したいっていうのに。なんで連れまわされるかなぁ」

テレビじゃない。じっとこちらを見つめて愚痴を吐いたのは……太郎ちゃん？

まさか。

奥さんは愛犬自慢を始めた。この声が聞こえていないようだ。我が耳を疑うが、変な仕草をして『頭がおかしい奥さん』のレッテルを張られたくない。

「ちょっと聞いてる？　アンタには聞こえてるはずなんだけど。私よ。太郎よ」

聞こえてる。聞こえてしまっている。犬が自己紹介をしている。気のせいなんかじゃない。

「メスなのに太郎って名前付けられて、いい迷惑だわ。自己紹介が恥ずかしいったらありゃしない。まぁ返事は良いわ。せっかくだから愚痴を聞いてもらおうかしら」

私はきっと疲れている。疲れているから犬が自己紹介なんかし始めるんだわ。あ、なんだか頭が回らない。でも冷静に……冷静にならなくちゃ。

「それにね、今日が三歳記念とか言ってるけど私の誕生日は二週間前に過ぎてるの。ペットショップで買う場合、生まれたての犬は二週間経たないと一般の家庭には入れないの。だから今日は誕生日じゃなくて、飼われることになった日。まったくもう」

奥さんの話は耳に入らない。テレビの音も聞こえてこない。多分今、すごく汗かいてる気がするんだけど、気付かれていないかしら……。

紅茶のカップを持つ手が震える。状況が飲み込めない。

「人間に愚痴を聞いてもらう機会なんて滅多にないわね。私の相手があなたでよかったわ。飼い主の知り合いなら愚痴の効果もあるってものよ」

相手？　相手とはどういうことだろう。話せる相手？　言葉の通じる相手？　いずれにせよ動物と会話するなんて話、フィクションでしか聞いたことがないわ。

奥さんはカップを片手に満面の笑みで愛犬自慢を続けている。あり得ない現象にありえないほどに動揺している私には、『散歩』とか『可愛い』とかそういう単語だけがかろうじて聞き取れるだけ。

「この飼い主、やたら服も着せたがるしね。こっちは天然で体毛っていう立派な服を着てるのに。体温調節に布は要らない体質なの。暑苦しいったらありゃしない。死ねババア」

「ブフォ！」

「まぁ！」

突然の悪態に思わず紅茶を吹きだしてしまった。奥さんの驚きの声は今までの話よりも耳に届いた。自慢話よりもその声とそのときの顔のほうが何百倍も印象深い。私のみっともない人間スプレーの方が印象深いとは思うけど。

「す、すみません！　ちょっと気管に入っちゃって……」

「あらあら。びっくりしちゃったわよ」

今のでかなり冷静になれた。間違いない。目の前で奥さんに抱きかかえられている太郎ちゃん（ダックスフンド3歳♀）は、私に愚痴をこぼしているのだ。

しかもそれはこの奥さんには聞こえていない。飼い主には聞こえていないのだ。それをいいことに……死ねババアと。

太郎ちゃんは笑いながら愚痴を続けた。

「散歩のコースだってもっと自由に駆け回りたいのに、なんか一定のルートばっかり走らされるし。これじゃ散歩という名の作業よ。つまらないにも程があるわ」

なるほど。しつけを受ける犬にもそういった不満があるのか。

もはや奥さんの言葉は耳に入らない。犬の言葉に関心を全て持って行かれた私がいる。

「餌も飽きた。最初はおいしいと思ったんだけどね、毎日そればっ

かり食べさせられて早三年。そろそろ拒絶してやろうかと考えているわ。新婚生活早々、毎日嫁に肉じゃがを食わされたら旦那は間違いなく逃げ出すわよ。狂気の沙汰よ」

また紅茶を吹き出しそうになった。太郎ちゃんはこんなに可愛がられているのに、もはや不満しかないんじゃないの？　これって人間側が察知するの大変よね。ていうか無理じゃないかと思う。

「リードとかいう首輪。あれもぶっちゃけ迷惑だわ。アレさえなければ私はこの世を自由に駆けまわれるのよ！　この世界を制覇できるのよ！　この足でね！」

ちょっと無理がある。自分のペットが世界を制覇しようと思っているとは飼い主も考えないだろう。せめて日本、いや、県制覇から始めて欲しい。

「まぁ、現状に甘んじてる私も私だけどね。本気出せば脱走くらいできるの。他人の敷いたレールを歩きたくなくても、他の道には駅がないから、生き延びることはできない。結局寿命を全うして暮らすには、どんな糞飼い主にでも媚びるしかないのよ。愛玩動物も楽じゃないわ。アンタはこのゴミみたいな飼い主にはならないでよね」

二度目の紅茶を吹きそうになった瞬間、誰かが帰ってきた。助かった。

四．カブトムシ

「あーつまりだ。地球上の生物ってのは生涯で一度だけ他の生物と通じ合えるタイミングが来るんだ。種族でなく個体でな。それぞれのタイミングが重なったとき、その個体同士で意思疎通ができる。わかるか？」

「は、はい……なんとか理解できます」

「つまり、そのタイミングが俺とお前で偶然にも一致したわけだ。この偶然はもはや奇跡だ。奇跡に出会えたことに感謝しようか」

「まぁ……そうですね……」

「なんだよ。なんか納得いかなそうな顔してんな。何か不満か？」

不満かと聞かれれば不満だ。どうせ通じ合えるなら、犬や猫がよかった。何故だ。何故カブトムシなんだ。

「私は絵本の世界のような出来事を待っていました。仕事に追われる毎日を背にこんな奇跡を待っていました。ですがしかし、その運命の相手が昆虫とは……」

「そんなこと言わないでくれよ。俺だってお前みたいなしがないオッサンってのはガッカリなんだぜ？　どうせなら女子高生か若いOLが良かった。わかるな？」

お互い様ってことか。思い通りにならないところで起こるものが奇跡というものだろう。仕方があるまい。

「さぁ、しがないオッサン。絵本の世界を夢見るようなオッサンは、現実によっぽど不満があるんだろうと思うんだが当たってるか？」

「不満……というか不安ですかね」

「ほう。言ってみろよ。楽になるぜ？」

カブトムシに世間話か。仕事が早上がりだったとは言え、こんなことに時間を割くとは思ってもみなかった。

徒歩で帰路を歩く中年の男が、肩にカブトムシを乗せて独り言。まだ明るい時間帯になんて怪しい光景を生み出しているんだか。

「息子が2人います。兄の方は浪人。今はアルバイトの合間に釣りをしたり、友達と遊んでいたりでまったく勉強をしないんです。このままじゃ進学は無理かと……」

「そりゃな。勉強する意味を見つけなければ、人は学ばない。教科書ってのは読む人間によっちゃただのゴミだからな」

カブトムシは嫌にまともなことを口走った。足が6本ある生物とは思えない。

「弟の方も受験生です。ですが、すごく泣き虫な子で、勉強はしっかりしているんですが、人間関係という面で先の高校生活が心配です」

「気弱なのか。でもそういう人間はそのまま成長すると却って良い人材になるんだぜ？　ていうかオッサンと似てるんだよきっと」

私に似ている、か。言われてみればそうかもしれない。私も小さい頃はすごく気弱で、いじめられたりもしていた。でも挫けずに頑

張っていたら周囲の人間は私のことを『優しい』と言い、慕ってくれるようになった。

そのおかげで自信もつき、イエスマン体質をいい意味で活かして出世することができた。それでも息子が自分のようになるという保障はない。

「妻はバリバリの仕事人でした。化粧品メーカーで働いていた彼女は仕事が全てのような女性でしたが、子供が生まれてからは仕事を辞めて主婦になりました」

「そりゃ本人の希望だろうよ。オッサンが気に病むことはないと思うぜ」

「いえ。家のことを任せっきりなのが申し訳ないんです。仕事をしたいと考えているかもしれないと思うとなんだか気が重くて……」

「……オッサンは幸せだな」

――幸せ。それは人それぞれ形のない定義を持つ。形あるものとして傍にあったり、形ないものとして心の奥にしまわれていたり。

「オッサンよ。俺達人間以外の生物はな、人間と接することで幸せを感じたり、人間を避けることで幸せを感じたりと、様々な幸せの形を抱いて生きてるんだ。悔しいことに、人間は生物の基準だ。これは悲しくも抗えない地球上の真理なんだ」

「……真理」

「生物の中で一番頭が良い。つまり、地球を進化させていくのは人

間の役目なんだ。俺たちは無意識に委ねてる。委ねざるを得ないんだ」

——それだけでも幸せだ。誰に狩られることもなく、食われることもなく、意志を持って動いている。それだけでも、人間は恵まれている。

「家族が好きか？」

「ええ。好きですよ。大事な家族ですから」

「その感情が羨ましい。昆虫界より人間界の方が慈愛に満ちてる。それだけは間違いない。でも俺は昆虫界が大好きだ。なんでだかわかるか？」

「どうしてでしょうか？」

「後悔しても意味がないからだ」

——後悔しても意味がない。

「後悔したところで人間になれるわけでも、犬になれるわけでもない。カブトムシとして生まれた事実を受け止めないまま生きるなんてことは無理なんだ。自分の意思も身の周りの環境も関係ない、生まれたことは否定できないのさ」

「……そうですね。私も同じですよ。自由な鳥になりたいと思っても、私は人間です。人間だからこそ鳥になりたいと思うんです」

「鳥になりたいと思えることが幸せなんだ。自分が人間だってこと

を嫌でも実感できる。後は生きるしかないんだから、後は悩むしかないんだから」

悩む、か。この悩みが無くなったとき、私は心から幸せだと感じるだろう。勝った、と拳を掲げるだろう。

「人間に生まれてよかったじゃねぇか。そう考えたことはあったか？」

「ありませんでしたよ。どこかのカブトムシになだめられるまでは」

「ハハ。そいつはどうも。俺もあと少しの命だからな。死ぬ前にアンタと出会えてよかったぜ。カブトムシらしからぬことを出来てしまったんだからな」

もうすぐ死んでしまうこのカブトムシに比べ、私の寿命はあと四十年近くあるだろう。悩んで生きるのは、その内何年くらいなのだろうか。

そろそろ家に着く。こんな時間に帰ってきたら驚かれるだろう。今日は外食にでも連れて行ってやるか。機嫌もいいことだし。

「カブトムシさん。うちに良い虫カゴがあるんですよ」

「ほう。そいつは嬉しい知らせじゃないか」

「先の弔いは任せてください。今年の夏はよろしくお願いします」

「こちらこそな。明日になったら喋れなくなるけど、頼むぜ」

「ええ」

家の前に着くと上の息子が釣り具とクーラーボックスを抱えて帰ってきた。

「親父、肩に乗ってるのってカブトムシ？」

「ああ。飼おうと思ってな」

「ハハ。子供みてぇ」

「今日は釣れたのか？」

そう聞くと息子はボックスを開けて中を見せてくれた。

「1匹だけ変な魚が釣れたよ。海の魚って家で飼えるのかな？」

「後で調べてみよう」

玄関を開けると下の息子がいた。その肩にはカブトムシではなく、可愛らしい黄色い鳥が留まっていた。

「あ、おかえりお父さん……。その……この鳥は……」

もじもじする息子を見てすぐにわかった。猫を拾ってきた幼い頃の自分が、きっとこんな顔をしていた。

「あー！　待ちなさい太郎ちゃん！」

慌ただしく聞こえてきたその声はお隣の奥さんだろう。駆けまわるダックスフンドの姿が微笑ましい。息子2人とリビングに入ると、奥の妻と目が合った。

「ただいま」

「おかえりなさい」

随分賑やかだな。さっそく虫カゴを探そう。

＝＝ＥＮＤ＝＝

微笑み列車は終着点へ（前書き）

高校二年生の冬ごろに書いた作品です。

微笑み列車は終着点へ

ガタン、ゴトン、と微弱な振動が心地よく、私は徐々に船を漕ぎだした。

ああ、もうすぐ降りないと。

正面に座るおばさん達の騒がしい声も、車内アナウンスも今では遠い。

ガタン、ゴトン。

ガタン、ゴトン。

ガタン、ゴトン……。

「で、また寝過ごしたって？」

帰省の度に母に呆れ顔で言われるのにも、いい加減慣れてしまった私が情けない。

「……車庫まで」

「車庫！？　あはははっ、終点でも起きなかったの？」

買ってきてやったドラ焼きを頬張る弟にまで馬鹿にされる。

「車掌さんが起こしてくれなかったの！」

「恥ずかしい子ねぇ。親の顔が見たいわ」

アンタだよっ！

そもそも乗り過ごしたのは私のせいじゃなくて、電車のせい。それにこの地元ローカル線限定。のんびりとしたあの走り心地。落ち着いた車内デザイン。眠るなという方が無理！

「きっと姉さんが寝過ごした料金で、あの路線は潤っているに違いないね」

三個目のドラ焼きを咀嚼する弟はニヤニヤと嫌味ったらしい表情を浮かべている。少しは遠慮して食べなさいよ。

それに微々たる電車賃であの寝心地を味わえるなら本望よ！　と正直に言えばまたからかわれるだけなので口には出さない。

「いいもん。今日起こしてくれた整備士の人格好よかったから！」

「姉さんは面食いだからなぁ」

「あら、いい男だったの？」

弟と母の食い付きは正反対。やはり、異性云々となれば母の歳になっても女性は女性みたい。

「うん、綺麗な顔してた」

「あら、そう。じゃあ、次も車庫まで乗り過ごさないとね」

「運命の出会いだったりするんじゃねえの？　まぁ、次に起こしてくれるのがそいつとは限らないけど」

「まぁ、またドラ焼き買ってきてちょうだい～」

母がのほほんとまた乗り過ごせと示唆するのも無理はないかもしれない。

次々と面々の胃袋に収まっていくのは、車庫の近所にある和菓子有名店のドラ焼き。しかも、またこれが絶品なのだ。

実家の最寄り駅から車庫までは歩いて二十分ほどだし、この帰省中に何度か足を運んでみようかな。

それに、もしかしたらあの整備士の顔も、もう一度くらい拝めるかもしれない。

「あ……」

翌日、あわよくばもう一度という目論みは、見事に叶った。

例の和菓子屋の前、出来たてのドラ焼きを買おうと列に並んでいる最中のことだった。

車庫のフェンスの向こうに彼の姿を目ざとく発見。視線は自ずと彼の動きを追ってしまう。

ドラ焼きの焼けるいい匂いより、昨日の整備士のちょっと油っぽい臭いが脳裏をよぎった。

歳はいくつだろう。何処に住んでるのかな。列車の整備中かな。

「あ……」

私の熱い視線に気付いたのか、向こうも一瞬がこちらを見たような気がした。いやいや、そんなわけはない。

サッと視線を逸らして、ドラ焼きはまだかなと思考を傾ける。

ふと、再び視線を向けるが彼の姿はない。なんだ、ちょっと残念。

「まさか、これ買うために車庫まで寝過ごしたわけじゃないですよね？」

「は？」

唐突に後ろから聞こえた声の主が、昨日の整備士のもののように感じて、勢いよく振り返ると、やはりそうだった。

油の臭いと、それにそぐわない端正な顔立ち。

「あ、昨日の……」

と口から洩れだしたところで、サッと頬に朱色が刺したのを感じた。そういえば昨日私がだらしなく眠りこけていたのを見られたんだった！

言葉がすぼみ、恥ずかしくなって顔を俯かせてしまう。頭上で彼が笑っているような気がして、耳まで熱くなってきた。

いったい何しに来たの。仕事は大丈夫なの。……そんなことは聞けない。

「僕もここのドラ焼き、好きですよ」

「あっ、美味しいですよね」

「やっぱり買って帰ったんですか？」

反射的に顔を上げて返事をすると、整備士の彼はクスクスと遠慮気味に笑っていた。

からかわれている、とちょっと憤慨しながら、少し怒気を込めて言い返す。

「……別に車庫がここに近いからわざと寝過ごしたってわけじゃないですから」

「わかってますよ」

「昨日、ファンになったんです」

「僕のですか？」

ボッ！　と顔から火が出そうになった。半ば図星を刺されたからだ。

「ドラ焼きのです！」

自分でもびっくりするほどの大声になって、さらに恥ずかしくなる。

「あはははははは」

整備士の彼は、お腹を抱えて笑っている。ハッとなって辺りを見渡すと、列に並んでいた他の客も苦笑いを浮かべている。

「明菜さん、面白すぎ」

「え？」

急に名前を呼ばれ、面食らう。見知らぬ男のはずだ。まさか、車内でよく寝る客として覚えられていたとしても、名前まで知られているわけない。

「あれ、やっぱり覚えてない？」

彼の言葉から、敬語が消えていることに気付く。私はコクコクと頷くことしか出来ない。

「高校の」

高校。

九年も前に卒業した高校生活が一瞬頭の中を駆け抜けた。

「サッカー部でお世話になりました」

「あー！！」

また大声になる。

確かにあの時も綺麗なな顔してる子だなと思った記憶も、一緒に思い出す。

「真琴くん！」

「正解です」

私が三年生でサッカー部のマネージャーをしていた時、やたらと懐いてきた一年生だ。

女顔で名前が名前だから女の子みたいと印象的で、しばらくは覚えていた。

「よく思い出しました」

本当だ。よく思い出したよ、私。弟曰く“面食い”が功を奏したみたい。

というか、相手もよく覚えていたものだ。変な印象を残した覚えはないのに。

「わざわざ辱めに来たんだ？」

「いやいや、昨日の今日で明菜さんがここにいるから寝過ごしたの

かと」

「……そんなわけない」

というか。

「昨日も私だって気付いてたのね」

「うん。でも、さすがに恥ずかしいかなと」

今だって十分に恥ずかしいよ。

「でも真琴くん、こんなローカル線の整備士してたのね」

「運命感じます？」

「いやー、ちょっと」

そこは正直な感想。あわよくばイケメンを拝みたいという打算が、見事にミラクルを起こしただけ。

そんな私の反応に満足したのか、真琴くんは爽やかな笑顔を浮かべ、

「じゃ」

と、私から離れた。

「仕事中なので、これで失礼します」

「え、あ、うん」

「よかったら、ドラ焼き、差し入れに来てくださいね」

さりげなく、次に会う口実を残して。

家に帰ると、母が目ざとく私の手土産を見止めてにんまりしている。その顔が、「整備士には会えたのか」と聞いていた。

「……問題はそこじゃない」

「じゃあ何が問題なの」

分かっているのかいないのか、率直に続きを促す。

「どの時間に何処に会いに行けばいいのかわかんない」

「〇〇電車の車庫事務所じゃないの？」

「うーん。整備士って、電鉄の職員なの？」

「知らないわよー」

私も知らないから困っているんだけど。だから、今日は結局ドラ焼きを差し入れることなく帰宅してしまったのだ。運命を感じたというのに。

「意外と根性無いわね」

私の気持ちを代弁し、母は早速ドラ焼きの袋に手を出した。

「姉さん、また寝過ごしたの？」

ゴミ箱に捨てられていた紙袋を見付けて、弟は冗談交じりに尋ねた。

「あの整備士さんに会いに行ったのよ～」

母が余計なことを言う。

「うわ、マジか」

「ドラ焼きを買いに行ったの！　取り敢えず、会うには会えた、けど」

「マジか！！」

嬉々として話しを聞こうとする弟。家族の期待に答え、今日の失態はうまくごまかしつつ、かいつまんで事情を説明する。

「……どこのドラマだ」

弟の率直な感想に、こちらとしては微妙な相槌しか返せない。

「向こうが覚えてたってことは昔から脈があったんじゃない？」

「わかんない。でも、もしそうならその時告白したりするんじゃな

いの？」

今更、なんで。

「男は意外と小心者なのです」

名前まで覚えてた癖に、どんな乙女だ。

「アンタ明後日には仕事に戻るんでしょ？　もたもたしていられないわよ」

何を期待している。

「多分、電鉄の社員だろ。ダメ元で行ってきなよ、車庫の事務所に行けば会える可能性もあるんじゃねぇ？」

昨日の今日で会いに行くのも、どうなのよ。そうは思ったけど、向こうが差し入れをくれと言ったのだから、問題あるまい。

家を出てから何度となく、そう自分に言い聞かせている。

取り敢えず。昨日と同じ時間に終着駅に降り、ドラ焼きを買った。

そこから少し歩いて、車庫のフェンス越しにいくつかある建物を覗き、事務所の文字を探した。

「あー、ついに見つけちゃった」

会いたいような、会いたくないような。そんな微妙な気分。

「お詫びとお礼よ、うん」

声に出して、自分に発破をかけてから、ドアノブを捻った。

「おじゃましまーす」

こんな事務所に来る客は少ないのだろう。社員が出てくるまでに少々時間が掛かった。

「はいはい。どうしました？」

痩身で壮年の、優しそうな男性職員が顔を出した。

「えっと、あの。私、先日寝過して車庫で起こしていただいた……」

「あぁ！」

職員さんの納得した表情が、やけに気に掛かった。もしかして話が広まっちゃってるの？

そう考えると恥ずかしくなって、必死に羞恥心を押し殺しながら言葉を続けた。

「その時のお礼を……と思いまして、お伺いしました」

と、そこまで言って言葉に詰まる。真琴くんの名字までは覚えてない……。なんて言って呼び出してもらおう？　それとも、預けておく？

「ちょっと待ってて」

考え込む私を制して、職員さんはどこかへ電話をかけた。

「うん、うん、そう。例のお客さん。うん」

そうです、すいません。例のお客です。

「お嬢さん、しばらくお待ちくださいね」

「はぁ」

妙に温かみのある笑顔を見ると、なんだか顔を上げていられなくなった。

ほどなくして、事務所の電話が鳴った。内線だろう。コール音が普通の電話とは違う。

一言二言、そして受話器が置かれた。職員さんの笑顔がこちらに向く。

「来るって」

誰が、と問い返す前に足音が聞こえてきた。ばたばたと、非常事態かってくらい荒い走り。

「明菜さん！？」

顔を出した真琴くんは、昨日とは打って変ってワイシャツと黒い

パンツスーツだ。……なんかかっこいい。

「あ、やっほー」

照れ隠しに、ドラ焼きの袋を掲げる。

「……嘘、ホントに来てくれたの？」

戸惑っているような、はにかんでいるような、そんな表情が窺える。なんか可愛いかも。

「だって、差し入れ持ってこいって」

「いや、まぁ、言ったけど」

ちら、と。真琴くんの視線が事務所の職員を見た。つられて、私も事務所内を見渡した。

職員さんが、微笑ましそうに、興味深そうにこちらを直視している。

「場所、移そうか」

真琴くんは「どうぞ」と私を先導してくれた。

ワイシャツの胸元に、笠原と刻まれたネームプレートが付いている。そうか、笠原真琴っていうんだ。

「ごめん、ホントに来てくれると思わなかったから」

「そう言う割りには、昨日の誘い文句は女慣れしてるなと思ったんだけどね」

「そうかな」

「そうだよ」

「明菜さんだ、って思ったら、なんか止まらなくて」

そういう台詞を素面で言えるあたり女慣れしてると思うんだけどね。

案内された場所は、簡素な応接室のようだった。古びた革張りのソファと、白いクロスが掛けられたガラスのテーブルが鎮座している。

私は改めて、ドラ焼きの袋を差し出した。

「部署にどれくらい職員さんいるかわからなかったから、足りるか心配だけど」

「ありがとうございます」

彼は素直に受け取り、ソファへ座るよう手のひらを返す。

「いいのに、別に。すぐ帰るから。それに、仕事中でしょ？」

「あ、今日はいいんです。俺非番だから」

「え？　だって……」

疑問をぶつけかけて、まさか、と言葉尻を濁す。

まさか。

私が差し入れを持ってくることを期待して、待っていたなど。

そんな都合のいい話を想像し、鼓動が高鳴る。

「明日の研修用資料が間に合わなくて、僕だけ。それ作りに来てるだけなんで」

「……あー、そう」

だから、今日は一般社員みたいな制服を着ているのか。

落ち着け、私。反応が、あからさまにがっかりしていることを悟られたくはない。

「研修って、なんの？」

「入社3年目までの職員対象で……」

コンコン。

会話の流れを断ち切るように、思いの外ノックが室内に響いた。

「失礼します」

若い女性の声がして扉が開くと、ふわりと甘い香りが漂った。

「真琴くん、お茶持ってきたわよ」

「いいのに、お茶なんて」

真琴くんは腰を浮かし、お茶が乗ったお盆を受け取ろうとする。

そんな彼を目端に捉えつつ、失礼にならない程度にと思い、お茶を運んできた女性を見た。

パチ、と。

女性と視線がかみ合う。失敗した。派手ではない、ばっちりメイクに縁取られた目が、私を見定めるように上下する。

私は、真琴くんに会うだけだと高をくくって、ジーパンにありふれたカットソーという変凡な出で立ち。

「ちょっと、何見てるの。お客様に失礼だろ！」

真琴くんと呼ぶあたり、親しいのだろう。彼の態度も同僚か後輩に当たるようなそれだ。

真琴くんと、年齢もそう変わらないように見える。

「ごめんごめん」

真琴くんに先に謝り、

「失礼しました」

私に向けそう言いながら、お茶を出してくれる。私は内心穏やかじゃなく、負けじと胸元を見た。

そこには「笠原」と。

真琴くんと同じ苗字が印字されている。お姉さん？　妹？　親戚？　同じ苗字なだけ？

彼女は、役目を終えたお盆を胸の前に抱えた。さりげなくお盆の前に重ねられた左手の指に、銀色のリングがきらめく。

「じゃ、ごゆっくり～」

「早く帰れよ」

真琴くんのぞんざいな言質に、近親者への気安さが混じっているのは、もはや疑うべくもない。

「ごめんね、明菜さん。五月蝿くて」

そういう言い方が、さらに女性との関係の親密さをうかがわせる。

「ううん。……そういえば真琴くん今年いくつ？」

私の唐突な質問に真琴くんは怪訝な顔をしながらも、

「２５になる、かな」

「一人っ子？」

「へ？　あ、うん」

「そう……」

「やっぱり、気分悪くさせたかな」

お茶に口をつけることもせず、じっとテーブルの一点を見つめる私を、真琴くんが気遣った。

「ああ、いや、なんか若いなって」

慌てて口にした言葉は思っていたこととはまったく違う。

「明菜さんだって、二つしか変わらないじゃないですか」

「なんで、私の事、覚えてたの？」

ちぐはぐな会話をしている。そう思ったけど、何故か余裕がなくなっている。早く帰りたいような、まだ帰りたくないような。

「なんでって……」

答えを遮り、次の質問をぶつける。

「なんで、この会社にいるの？」

なんで、こんな再会。

「明菜さん？」

なんで、私に近づくの。

見知らぬイケメン整備士のまま、夢を見させてくれないの。

それは、勝手な感情だって、理性では分かっている。

さすがに、真琴くんにも私の不穏な空気は伝わる。

駄目、真琴くんの顔が見れない。俯いてしまう。

「真琴くんはなんで……」

なんで、私の気持ちを揺さぶるの！

ジーンズの太腿の上に雫が落ちて、反射的に肩がびくりと震える。

泣くつもりなんてなかったのに。なんで。

「……ごめん、この後用があるの。さよなら！」

テーブルに膝が当たって、湯のみが倒れた。

気が咎めたけど、振り返って片付けも、謝るのも出来ない。

勢い良くドアを開け、早足に出入り口へ向かう。

「明菜さん！？」

真琴くんの気配は、それ以上追いかけてくる様子はない。

もし、追いかけてきたら全力疾走する心持ちだ。あんな女性の存在のせいで泣かれたと、勘ぐられたくない。

いや、

真琴くんの事を少しでも好きになっていたという気持ちを、知られたくない。

幸いなことに、事務所に人影は無かった。カバンを抱え込んで、一気に来た道を戻る。

追ってこないで。

そんな、本音とは矛盾した言葉で感情をひた隠しにした。

駅に辿り着いた頃には、息が上がっていた。背中にも、じんわりと汗をかいている。

改札機に切符を滑り込ませる瞬間、背中を覗った。改札業務をする駅員と売店のおばちゃんしか、電鉄関係の職員は見当たらない。

不安と、安堵が混じる。電光掲示板を見ると、発車まであと5分少々。私は、逃げるようにホームへと走った。

私は、出来るだけ人目を避けるように階段下のベンチに腰かける。

電車がホームに到着するまでに、息を整える。涙をぬぐうと、大

きなため息がこぼれた。

「バカばかしすぎる」

なんてバカな行動をしたのか。落ち着けば落ち着くほど、度重なる自分の失態が浮き彫りになる。

……何を、期待していたんだろう。最初の出会いは9年前で、一緒に過ごした期間などたったの4ヶ月程度。

「なんであそこで泣くかな、私」

彼女がいたって、結婚していたって、おかしくはない。牽制されたからといって、なぜ、さらりとその事実を流すことができなかったのだろう。

笠原女史は、わざわざ私を見に来たに違いない。悔しさにも似た、嫉妬。

そして敗北。

敗北？　惨敗でしょ？

最初から勝負は目に見えているのに。あの、左手の指輪に敵う力が自分にあるとでもいうのか。

進入音と、アナウンスが空から降ってくる。ローカル線の終着駅で、始発駅でもあるそのホームに、電車が滑らかに滑り込んで来た。

まばらに吐き出される乗客から身を隠すように息を潜めた。

電車は、簡潔な車内清掃の後、再び乗客を受け入れようと扉を開けた。この電車は車庫には入らず、折り返し運転をする。

最寄のドアから車内へ移り、適当な座席に腰かけた。

追いかけてはこない。

その事実を受け入れると同時に、発車を知らせるベルと共にドアが閉まった。

ゆっくりと景色が流れていく。車庫に走る線路と、その奥に操車場が見えた。もちろん、そこへ出入りする人影も。

女々しい。

最後の最後まで、女々しい。

明日には仕事で隣県に戻らなくてはならない。

もう、会う事も、会いに行く事もない。

そう言い聞かせる。

「いい出会いだったな……」

にも関わらず、またもや独り言である。汗も、涙もすでに引いていた。

「だった、って過去形にしないでよ」

「え？」

顔を上げると、息を弾ませた真琴くんの顔がある。手すりに腕と額を預け、荒い呼吸を落ち着けようとしている。

「え？　えぇ！？」

思わず声が大きくなる。乗客の視線が、咎めるように私たちに向けられた気がする。

「なんで」

今日は、あと何回「なんで」と思うのだろう。

「なんでって、あんな泣いて飛び出されたら気になるでしょうが！」

言葉に怒気があるのは、気のせいではない。

「お、怒ってるの？」

「怒ってるよ！」

私達の大声に気付いた車掌が、車輌に乗り込んできた。声を掛けようとしたところで真琴くんの制服を認め、口ごもる。

真琴くんは片手を挙げ「すみません、大丈夫です」と断りを入れた。

真琴くんは私の赤くなった瞳をジッと見つめる。

「なんで、泣くの？」

声音を落とし、私の座る座席の前に立つ。泣いてしまったのはバレている。

私は、その理由を答えられない。あまりにも大人気なく、恥ずかしい。

「明菜さんが降りる駅、どこ？」

「……」

「そこまでの間に答えられなかったら、一緒に降りるから」

「な、何！　どうしてそんな勝手なの！」

「勝手なのは明菜さんでしょ！　ほら、答えは？」

「やだ、言わない」

意固地になる。

「そもそも、あなたこんな事して、会社に怒られるわよ？」

「今日非番って言ったじゃん」

「制服を着てたら、周りからみたら仕事中と同じよ」

「そんなこと、どうでもいいから」

切って捨てられてしまった。

「百合がなんかした？」

あの女性は、百合というのか。

「……別に。お茶出してくれただけだし」

「だよね？　じゃ、なんで？　僕、なんかした？」

「……別に」

「別に、じゃ分かりません」

……言ってしまったら楽になるだろうか。あなたに奥さんがいると分かって、失恋したショックです。って。

失恋？

自分の気持ちになぜか腹が立った。最初は、軽々しくも「イケメン整備士」程度の認識だったのに。いくつかのファクターが重なり、それだけで好きになっていた。

「明菜さん？」

そんな風に、名前を呼ばないで。未練が大きくなるから。

年下の男のくせに、ため口で話すところとか、結構好き。たった2日のうちに、こんなに好きな気持ちが大きくなってるなんて、気

付きたくなかった。惨め過ぎる。

しかも、実は妻帯者でしたなんてオチ。

何も言わず俯いた。

鈍行電車は、二駅を通過していた。あと三つで、私が降りる駅。

真琴くんが私の隣に座った。

「このまま、終着点までいきませんか」

脈絡のない申し出に、反応が出来なかった。瞳だけ、窺うように真琴くんを見上げる。

そこに、表情はなかった。窓の外へ向けられた瞳に、私はもちろん映っていない。

「勤務中の職員は、座席を占領したらだめなんでしょ」

私も、話の筋には全く関係のない話題を持ち出す。

「見つかったら、怒られるくらいです」

だが、生真面目にも返事がある。

「もう、なんで泣いているのとか聞きませんから」

根負けしたのか、言葉づかいも丁寧だ。それはそれで寂しく、もったいない。

「しばらく、一緒にいてもいいですか」
しばらくとは、終着駅までか。
「終着駅まで？」
「……終着点、まで」
何が違うのだろう。
「答えなかったら、一緒に駅降りるんでしょ？」
「そんなこと、言いましたね」
はは、と乾いた笑いが聞こえた。
ガタン、ゴトン。ガタン、ゴトン。と電車に揺られる。
「なんで、真琴くんは私を覚えてたの？」
「明菜さんだって覚えてくれたでしょう」
「だって真琴くんが犬みたいに素直に懐いてきて」
「はい」
「女の子みたいな男の子で」
「うん」

「顔も結構好みのタイプで」

「……うん」

ガタン、ゴトン。

「なんで、あの時声を掛けなかったの？」

会話は交わすも、私達の視線は交わらない。

「……明菜さん、あの時部長のことが好きだったでしょ？」

いつの間にか真琴くんの口調はため口に戻っていた。

「へ？」

「あんな一途に恋してる明菜さんに声を掛けられるほど、僕は肝の据わった性格じゃないので」

意外な答えが返ってきて、面食らう。

「あと、この会社に入った理由……でしたっけ？」

それはあの応接室で半ば暴投気味に投げ掛けた言葉だ。

「それはあなたが、地元のローカル線が好きだと話していたから、柄にもなく縋り着いたからです」

そんな話をしたなんて覚えていない。

「柄になく縋り着くしかないほど、無垢な高校生は貴方を好きになったんです」

ガタン、ゴトン。

揺れる、揺れる。心とともに。

ガタン、ゴトン。ガタン、ゴトン。

「笑ってください。僕はサッカーなんて微塵も好きじゃないし、苦手でした」

鼓動が速くなって、上手く喉から言葉が出ない。

「一目惚れって、本当にあるんだなって思いながら、貴方と一緒にいたかっただけだ」

ガタン、ゴトン。ガタン、ゴトン。ガタン、ゴトン。

「部活以外で貴方を見かけるたび、僕はストーカーかってくらいガン見してた」

ガタンゴトン、ガタンゴトン、ガタンゴトン。

「卒業しても、就職しても、僕は貴方が好きだったんだ」

「……」

ガタンゴトンガタンゴトンガタンゴトン。

「だ、誰がそんな話信じるのよ！　っていうか、好きだったって、真琴くんも過去形じゃない！」

だって、結婚してるじゃない！

見ないようにしていたのに、勢い余って真琴くんを正面から見据える形となる。ぱちりと、視線が絡んだ。

「過去形じゃなくてもいいの？」

「不倫は駄目よ！」

「不倫？　明菜さん、結婚してたの？」

「結婚してるのは真琴くんでしょ！」

「してないよ！」

あ！　と、真琴くんが私を指さす。

「もしかして、百合のこと勘違いしてない？　それで泣いたとか？」

う、図星だ。

「ちょっと、それはない」

真琴くんは大仰なため息をついて、前屈みにつんのめっている。

ガシガシと髪を掻きむしり、またため息。

「な、なによ！　それはないって、何がないのよ」

見つめられて、羞恥心のメーターが振り切れそうだ。

「名字同じだし、仲良さそうだったし！」

「だって、嫁だし……」

やっぱり嫁じゃん！

「兄弟いないんでしょ！？　誰の嫁よ！」

「……」

真琴くんは気まずそうに一瞬だけ視線を逸らしてから、おずおずと切り出した。

「うちの親父……」

「……」

……なんなんだ、この展開。

「そんな理由で泣いちゃったって、明菜さんの気持ち都合のいいように受け取っちゃうよ？」

貴方の話のほうが、よっぽど都合がよくないですか？

「うちの親父、再婚して結構年下の奥さんもらったの」

電車は、私たちを乗せて順調に線路を進む。すでに私が降りるはずの駅は通過してしまった。

「俺より一個下なんだけど、去年契約社員としてうちの事務に来たんだよ。息子の働く姿を監視するんだって」

「それは……仕事しにくいね」

仕事がやりにくい以前に、過保護すぎやしないか。

「今日、明菜さんが来たって、俺が飛び出していったから興味本位で見に来たんだ」

「やけに仲がよくない？　いくら年下で母親でも……」

「んー、幼馴染だし。息子の幼馴染と結婚する親父もどうかと思うけど、二人が幸せそうだから、俺は別に……」

「幼馴染！？」

私だったら、絶対反対だし、そんなことになったらやさぐれてしまうに違いない。複雑だ。

でも。いつの間にか、真琴くんと普通に会話できるようになっている。

「明菜さん」

改めて名を呼ばれる。
とくん、と心臓が跳ねた。
「安心した？」
安心というか、なんというか。自分の愚行に頭が上がらない。
「ね、さっきの続き」
「……どれの続きよ」
とくん。
「俺と、終着点まで行きませんか」
「路線の？」
「違う。人生の」
真面目に告げるそのセリフが、やけにフィルムがかっていて。
「今、明菜さんに好きな人がいなかったら、の話になっちゃうけど」
鮮明に耳朶へ馴染む。
とくん、とくん。
「好きな人なら、いるよ」

「え！　うそ！？　この期に及んで！？」

慌てて、怯んで。

真琴くんの気持ちが手に取るように分かる。

「うん。電車のおかげで出会った、イケメン整備士さん」

「……」

ぽかんと、みのり君の口が開いたまま閉じられない。

おかしくて、思わず笑ってしまう。

「やだ。みのり君面白すぎ」

あの日。電車で私を見つけた時、この人はどんな気持ちだったのだろう。

あの日。サッカー部で私を見つけた時、この人は何がきっかけで一目惚れしてくれたのだろう。

「とりあえず、終着駅まで行こうか」

九年も、好きな人を忘れないってどんな強い想いなんだろう。

もう少し。

列車に揺られながら話がしたいと思った。

青春ノスタルジア（前書き）

高校三年生の夏に書いた作品です。

青春ノスタルジア

「コノカ、なんか当たってるんだけど」

「なんかっていうな！　その……当ててるのだ」

「ふぅ」

「何故、溜息をつく！？」

コノカは贔屓目抜きで見て美人だ。少々、話し方や性格に難はあるものの、すらりと伸びた長い腕と脚にモデルのような抜群のプロポーションに、西洋人形を想起させる大きく美しい瞳は、それらのマイナス点を補って余り有る。

故にコノカが異性に抜群の人気を誇るのは当然だと思う。

だからこそ、コノカが僕のような平凡なやつに懐いてくるのかが分からない。

僕より魅力的な者などいくらでもいるというのに。

「ふ、ふふ。悠里、どうだ？」

「照れんならやめときなよ。……別になんとも」

「てててて照れておらん！　む、むしろ照れてるのは悠里の方ではないのか！？　どうだ、温かいだろう。柔らかいだろう？」

「……別になんとも」

チッ、と分かりやすい舌打ちをするとコノカは僕に絡めていた腕をするりと解いて隣を並んで歩く。

柔らかそうな頬にまんまるな風船を作って、露骨に不機嫌面をこちらに見せ付けているようである。

僕は山の天気よりも変わりやすい幼馴染の態度を煩わしく思いつつ焼けた空にふと視線を向けた。

秋の高い空一面を真っ赤に染める日は徐々にその身を隠し、夜を彩る衛星にバトンを手渡そうとしているところである。

これまで幾度も見たこの光景も、コノカと帰路を共につく光景も、今の僕にはまるで別の物のように感じられる。僕はなんだかやるせなくなり、コノカに気付かれないようにそっと溜息をこぼした。

変わったのは世界ではなく、僕の方だというのに。

翌日、“いつも”のようにコノカとともに学校へ向かい、“いつも”のように退屈な授業を終え、“いつも”のように図書委員の雑務をこなし、“いつも”のように僕を甲斐甲斐しく待つコノカと帰宅しようとした時だった。

「俺、コノカちゃんのことが好きだ！　付き合ってくれ！」

青空が茜色に上塗りされ、校内をうろつく生徒が疎らになった頃、

図書室の扉を一枚挟んだ向こうでは青春群像劇が繰り広げられていた。

コノカに愛の告白をした声の主に僕は心当たりがあった。

下條カケル。サッカー部のエースで女子に人気の爽やか系の美少年だ。

誰にでも気軽に接し、びっくりするほどの好青年で、二面性があるといったお約束のキャラもない、漫画の主人公のような男だ。

もし、告白などされたら卒倒してしまうと女子は姦しく話している。男子でさえもあいつなら仕方ないなと容認している。

それほどの欠点なしの正真正銘の美少年がコノカを好いているというのだ。

つまり、これは我が校を揺るがす一大事件に違いなく、僕はそれに偶然出くわしてしまったのだ。

僕は嫉妬で胸を焦がし、焦りが胸の内で暴れまわるのを

感じなかった。

ああ、そうか。と、さも何事も無いように受け止めている。自分でも驚くべき事態だ。……ほんの数週間前なら。

僕はムードとか甘酸っぱい雰囲気とか、そういうものを阻害するのを躊躇う性分であったのだが、自然と扉に手を掛けて力を込めていた。僕は変わってしまったのだ。

ガララと扉が開き、緊張感を漂わせていた二人の間に異音を投げ込む。

案の定、ビクリと身体を震わせた二人の視線がこちらへ向く。

「あ……」

バツの悪そうな表情を作るコノカを尻目に、僕は下條に「取り込み中すまない」とだけ伝えると、足早にその場から離れた。

後ろから僕を呼ぶ声が聞こえた気がしたが、僕が早く帰りたいがために下條の告白の邪魔はしても、中止させるほど僕は野暮ではないので、そのまま振り返らずに校舎から立ち去った。

帰宅して、日が完全に落ち、藍色の空に月が昇る頃。

こんこんと僕の部屋に控えめなノックが響き渡った。

そろそろだと思っていた。

僕はゆっくりと立ち上がると部屋の扉ではなく、窓を開いた。

「こんな遅くに何の用？」

あらかじめ用意していた言葉を口にする。少し冷たい反応かとも思ったが、これからの展開を考えれば妥当だろう。

窓の向こう、隣の一軒家に住むコノカは、何の用って……。と気まずそうに言い淀む。

僕はそんな彼女が二の句を繋ぐまで、ひたすら無言を貫いた。

やがて強く決心するように大きく息を吸い込み、コノカは思いもともに吐き出すように話し始めた。

「その、今日の……放課後のことなのだが」

「下條に告白されたんだろう？」

「……ッ。そうだ。やはり聞いていたか」

「立ち聞きするつもりは無かった。……良かったじゃないか」

「良かった……だと」

コノカは絶句し、我が耳を疑うような素振りを見せた。

「ああ、良かったじゃないか。誰がどう見たってあんないい男は中々いないと思うぞ。容姿端麗、頭脳明晰、運動神経抜群、明朗快活――、そんな下條に物足りないと感じることは無いだろう？」

「……そうではない、そうではないのだ……ッ！」

「美男美女、お似合いのカップルじゃないか」

「そういうことではないッ！」

――コノカが吠える。

「確かに下條はいい男で私は彼に告白された。……だが、そんなことはどうでもいい！　私はお前のことが好きなのだから！！」

頬が燃えるように赤々く、緊張したようにピンと身体を固くして、目を潤ませるコノカはそれはそれは美しかった。

けれど、

「ありがとう」

「ゆう「けど、ごめん。僕はコノカの気持ちには応えることは出来ない」……ッ！？」

――雫が不意に遥か下へと落ちていく。

「僕もコノカのことは好きだけど……いや、好きだったからこそ、コノカの思いに応えることは出来ないんだ」

「な、……なん、で？」

それが言えたら幸せなのにね。

僕はコノカの問いには答えない。答えることが出来ない。

だから、代わりに笑って僕はこう言おう。

「コノカ、どうか幸せに。そして、

さようなら

」

「おはよ。コノカ」

「……」

「そんなあからさまに避けられると流石の僕もちょっと傷付くんだけど」

「……ごめん」

「別に謝って欲しいわけじゃないって」

「……」

思わず苦笑いをこぼさずにはいられない。けど、きっといつか、コノカも分かってくれるだろう。人は変わるのだから。いくら、コノカが素敵な女の子だとしても、いつまでも好きでいるわけにはいかない。何故なら僕は。

っと、予鈴が鳴っちゃったか。

「コノカ、急ごう。次は体育なんだし、女子はバレーボールなんだってさ。楽しみだね。さ、ほら！」

渋るコノカの手を引いて、僕は女子更衣室へと向かった。

クリスマスなんて大嫌い（前書き）

高校三年生の冬ごろに書いた作品です。

クリスマスなんて大嫌い

「ね、いいでしょ？　今年は朝比奈もクリパしようよ」

「行かないって言ってんでしょ」

また今年も、この日がやってきてしまった。そもそも別にキリスト教徒でもない不特定多数の人間が、ただ聖誕祭というイベントに託(かこつ)けて、わいわい騒ぐことがおかしいのよ。

忌々しい。毎年、毎年律儀に祝っちゃってさ。馬鹿じゃないの。

「何度言ったら分かるの？　私はクリスマスが大っっ嫌いなんだって！」

「とかなんとか言っちゃってぇ。実は彼氏と約束したりしてたり……」

「なんやてっ！？」

「わけないっつーの。由美もいい加減その彼氏説はやめなよね」

まったく……、揃いも揃って馬鹿なこと言わないでよね。

「えー、せっかくのクリスマスだよ？　一緒に楽しもーよぉ。ついでに私の惚気話を聞いてよぉ」

「私はそういうことあるごとにわいわい騒ぐのは好きじゃないの。それに由美の惚気なんか聞きたくないってば。だいたい彼氏いない

し」

「ほんまに？」

「なんで森口に念押しされなきゃいけないわけ……？」

なんでそこで頬を染めるかな。

「だって俺、朝比奈のこと好きやもん」

……またか。

「ずっと言ってるけど、俺と付き合ってくれへん？」

「ずっと言ってるけど、ごめんねー」

「また、アカンかった……」

「それじゃあねー」

――クリスマスの度に浮足立っちゃって、ほんと馬鹿みたい。

「お姉ちゃん、ケーキ。ケーキだよー！」

うちに帰るや否や比奈子がホールケーキを手に、駆け寄って来た。

やっぱり、その雪原のようなクリーム地の上には、にこやかに笑う砂糖菓子の赤いアイツが健在だ。

「サンタ、ムカつく、嫌い。比奈子にあげる」
「やったぁ！　お姉ちゃん大好きっ！」
毎年、毎年。クリスマスケーキなんてお呼びじゃないっての。
……クリスマスなんてほんっとに嫌い、大嫌い。
祝う代わりに呪ってやろうか、ばーかばーか！

ブルルってポケットの中で携帯がクリスマスに嫌気しか感じない私の代わりに身震いした。
規則的に、定感覚で震えているからメールじゃなくて電話らしい。
私は液晶に映る相手の名前を見て、ため息をもらしてから通話に応じた。
「……もしもし？」
『今から朝比奈の家にお邪魔するでー』
「はぁ！？」
私が二の句を継ぐ前にピンポーンと、うちにチャイムが鳴り響いた。

「はやっ！？」

「お姉ちゃんの友達？　上がってもらいなよ」

「冗談じゃない。すぐに帰ってもらうから！」

少なくない憤りを覚えながら、私は駆け足で玄関まで向かい、勢い良く扉を開いた。

「あいたっ！？」

「あ、ごめん！」

ガンと、強く扉で頭をぶつけた森口がごろごろと地面を転がり回って悶絶する。関西人のリアクションはオーバーだ。……いや、それくらいしてもいいほど、痛いかも、これは。

昨夜から降り積もっていた雪と土とで、すっかり汚れてしまった森口は、額を押さえながら立ち上がった。涙目だった。

「あー、これは効くわ。ええもん貰いましたよって」

「あーあ。もう、どろどろにしちゃって……。そんなんじゃ今すぐ帰れなんて言えないじゃない」

「よっしゃ、計画通りや！」

「体張るわね……。あと、ドヤ顔やめて。涙ぐんでるの見ると残念な気持ちになるから」

いきなり人の家に押し掛ける無礼さとかクリスマスに対する嫌悪感とかが、森口の憎めないキャラを見るとどうでもよくなってきた。

「それにしても……」

「ん？」

「お前んち、スゲーな」

「なにが？」

「イルミネーション。クリスマス嫌いって言ってた割にはめっちゃ気合い入ってるやん」

「……ああ。別に。家族の趣味よ」

――恥ずかしい。

明滅する小さな光がうちを覆い尽くすのは毎年のことだ。電力を垂れ流すのもいい加減やめて欲しい。

「で、何の用？　ってかさ、なんであんたが私の家知ってんのよ？」

「んー、俺が朝比奈のストーカーやから？」

したり顔で真面目にそんなこと言われても困るんだけど。

「なんちゃって」

わははって大笑いされても。

「朝比奈のことならなんでも知ってるで」
「森口が叩く扉はうちじゃなくて警察署のようね」
「その冗談、面白いで」
「半分、本気だけど」
「わはは。……なぁ、ちょっと外出えへん？」
返事を待たずに私の手を引くんじゃない、このストーカー。
寒いのに……、もう。
「で、どこ行くわけ？」
「うへへ」
「気持ち悪っ！　ど、どうしたのよ？」
「いやぁ、こうして見ると俺達恋び」
「帰るわよ」
「すんませんでした！　渡したいものがあるだけなんや。堪忍してや」
「……渡したいもの？」

そうそう、とにこやかに笑って森口は肩に掛けた鞄をごそごそと中身を漁る。

目当ての物を鞄から慎重に取り出して、突き出すような形でそれが私の前に差し出された。

白い正方形の箱だ。

「プレゼントや」

……。

……。

また、か。

クリスマスだからって、プレゼントとかデートとか。なにがそんなに嬉しいんだか。

「なに、これ。クリスマスプレゼントって？　物で私を釣ろうって？　クリスマス嫌いの私にメリークリスマスって言って欲しいわけ？　ばっかじゃないの？　なに、嫌がらせ？　私が嫌いなの知ってわざわざこんなことするの？」

私が嫌悪感を顕にしてるにも関わらず、森口はまた、大口を開けてわははと大笑いした。

「メリークリスマス？　違う、違う」

オーバーな身振り手振りで否定して、不適に不敵なキメ顔で。

「ハッピーバースデー、やろ？」

「え？」

「朝比奈、誕生日おめでとさん」

……な、ななな。　なんで？　なんで！　なんで知ってんの！？

誰にも言ってないのに！

「朝比奈のこと、なんでも知ってるって言ったやろ。誕生日くらい楽勝やで」

……ああ、森口はストーカーだったね。

昔から、私の誕生日はクリスマスと一緒くたにされていた。

クリスマスなんて嫌い。私だけの特別な日じゃなかったから。誰も私のことを祝ってくれなかったから。

「毎年さ、豪勢なイルミネーションでみんなに祝ってもらってるみたいで羨ましいな」

「……ッ！？　……そういう発想はなかったわ」

「そう？」

……森口はポジティブな考え方をしてるんだね。

「俺なんか元旦やさかい、世界中がめでたい、めでたいでぇ！　っ

て感じやで」

「……元旦」

上には上が。

「ささ。プレゼント開けてみて」

「……え！　食べ物なの？　もしかして、ケーキ？」

「あれ、外した？　いやぁ、サンタもツリーも乗ってないバースデーケーキを1ホールなんて、食べたことないんちゃうかって思ってんけど」

「……ないかも」

……ああ。なんだか、ヤバい。

結構ツボった……かも。

「森口って、意外と私のこと分かってるね」

「意外と？　心外やな。朝比奈のことならなんでも分かってるし、こんなに好きって言ってるんやから、ちょっとは真剣に考えて欲しいなぁ」

確かに、森口のこと軽く流し過ぎてたかも。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1870v/

徒然短編集

2011年10月9日22時31分発行